

夢殿

楠山正雄

青空文庫

むかし日本の国に、はじめて仏さまのお教えが、外国から伝
 わつて来た時分のお話でございます。

第三十一代の子天子さまを用明天皇と申し上げました。この
 天皇がまだ皇太子でおいでになった時分、お妃の穴太部の真
 人の皇女という方が、ある晩御覧になったお夢に、体じゆうか
 らきらきら金色の光を放つて、なんともいえない貴い様子を
 た坊さんが現れて、お妃に向かい、

「わたしは人間の苦しみを救つて、この世の中を善くしてやり

たいと思つて、はるばる西の方からやつて来た者です。しばらくの間あなたのおなかを借りたと思う。」

といいました。

お妃はびつくりなすつて、

「そういう貴いお方が、どうしてわたくしのむさくるしいおなかの中などへお入りになれましょう。」

とおっしゃいますと、その坊さんは、

「いや、けつしてその氣づかいには及ばない。」

と言うが早いか踊り上がつて、お妃の思わず開けた口の中へぽんと跳び込んでしまったと思うとお夢はさめました。

目がさめて後お妃は、喉の中に何か固くしこるような、玉でも

くくんでいるような、みよう妙なお気持ちきもちでしたが、やがてお身重みおもになりました。

さて翌年よくねんの正月しょうがつ元日がんじつの朝あさ、お妃きさきはいつものように御殿ごてんの

中あるを歩きながら、お厩うまやの戸口とぐちまでいらつしやいますと、にわか

にお産さんけ気がついて、そこへ安やす々やすと美うつくしい男おとこの御子みこをお生うみおとし

になりました。召めしつか使つかいの女官じよかんたちは大おおさわぎをして、赤あかさん

の皇子おうじを抱だいて御産屋おうぶやへお連れつしますと、御殿ごてんの中きゆうは急こんじきに金色

の光ひかりでかつと明あかるくなりました。そして皇子おうじのお体からだからは、それ

はそれは不思議ふしぎなかんばしい香かおりがぶんぶん立たちました。

お厩うまやの戸との前まえでお生うまれになつたというので、皇子おうじのお名なを厩う

戸皇子まやどのおうじと申もうし上げあしました。後のちに皇太子こうたいしにお立たちになつて、

聖徳太子と申し上げるのはこの皇子のことです。

二

さて太子はお生まれになって四月めには、もうずんずんお口をお利きになりました。明くる年の二月十五日は、お釈迦さまのお亡くなりになった御涅槃の日でしたが、二歳になったばかりの太子は、かわいらしい両手をお合わせになり、西の方の空に向かつて、

「南無釈迦仏。」

とお唱えになったので、おつきの人たちはみんなびっくりして

しまいました。

太子たいしが六歳さいの時ときでした。はじめて朝ちよう鮮せんの国くにから、仏ほとけさまのお経きようをたくさん献けんじよう上じようしてまいりました。するとある日ひ太子たいしは、
天子てんしさまのお前まえへ出て、

「外がいこく国こくからお経きようがまいったそうでございます。わたくしに読よま
せて頂いたきとうございます。」

とお申し上もうげになりました。
天皇てんのうはびつくりなすつて、

「どうしてお前まえにお経きようが分かるだろう。」

とおっしゃいますと、太子たいしは、

「わたくしはむかしシナの南なん岳がくという山すに住すんでいて、長なが年ねん

ほとけみち
仏の道を修しゆぎよう行いいたしました。こんど日本にほんの国くにに生まれて来くることになりましたから、むかしの通とおりまたお経きようを讀よんでみたいとおもいます。」

とお答こたえになりました。

天皇てんのうははじめて、なるほど太子たいしはそういう貴人とうとの生うまれか

わりであつたのかとお悟さとりになつて、お経きようを太子たいしに下くださいました。

太子たいしが八歳さいとしの年としでした。新羅しらぎの国くにから仏ほとけさまのお姿すがたを刻きざんだ像ぞう

を献けんじよう上うすいたしました。その使者ししやたちが旅館りよかんに泊とまっている様よう

子うすを見みようと思おもいになつて、太子たいしはわざと貧乏人びんぼうにんの子供こどものよ

うなぼろぼろなお姿すがたで、町まちの子供こどもたちの中に交まじつてお行きにな

りました。すると新羅しらぎの使者ししやの中に日羅にちらという貴人とうと坊ぼうさんがおり

ましたが、きたない童たちの中に太子のおいになるのを目ざとく見付けて、

「神の子がおいでになる。」

といって、太子に近づこうといたしました。太子はびっくりして逃げて行こうとなさいました。日羅はあわてて履もはかず駆け出してお後を追いかけてきました。そして太子の前の地びたにぺたりひざをついたままうやうやしく、

「敬礼救世観世音菩薩。妙教流通東方日本国。」

と申しますと、日羅の体から光明がかつと射しました。そして太子の額からは白い光がきらりと射しました。日羅の言った言葉は、人間の世の苦しみを救って下さる観世音菩薩に、そ

してこの度東の果ての日本の国の王さまに生まれて、仏の教えをひろめて下さるお方に、つつしんでごあいさつを申し上げますという意味でございます。

大きくおなりになると、太子は日羅の申し上げたように、仏の教えを日本の国中におひろめになりました。はじめ外国の教えだといってきらつていた者も、太子がねつしんに因果応報ということのわけを説いて、

「人間のいのちは一代だけで終るものではない。前の世とこの世と後の世と、三代もつづいている。だから前の世で悪いことをすれば、この世でその報いがくる。けれどこの世でいいことをしてその罪を償えば、後の世にはきつと幸福が報ってくる。だから

らだれも仏さまを信じて、この世に生きている間たくさんいいことをしておかなければならない。」

こうおさとしになりますと、みんな涙をこぼして、太子とごいっしょに仏さまをおがみました。けれど中でわがままな、がんこな人たちがどうしても太子のお諭しに従おうとしないで、お寺を焼いたり、仏像をこわしたり、坊さんや尼さんをぶちたたいてひどいめにあわせたり、いろいろな乱暴をはたらきました。太子はその人たちのすることを見て、深いため息をおつきになりながら、

「しかたがない、悪魔を滅ぼす剣をつかう時が来た。」
とおっしゃって、弓矢と太刀をお取りになり、身方の軍勢の

まつ先に立つて勇ましく戦つて、仏さまの敵を残らず攻め滅ぼしておしまいになりました。

こうしてこの太子のお力で、いろいろの邪魔を払つて、仏さまのお教えがずんずんひろまるようになりました。摂津の大坂にある四天王寺、大和の奈良に近い法隆寺などは、みな太子のお建てになった古い古いお寺でございます。

三

太子のお徳がだんだん高くなるにつれて、いろいろな不思議な事がありました。ある時甲斐の国から四足の白い、真つ黒な小馬を

一匹びきちようてい朝廷ていに献けんじよう上じよういたしました。太子たいしはこの馬うまを御覧ごらんにな

ると、たいそうお喜びよろこになつて、

「この馬うまに乗のつて国くに中じゆうを一めぐりして来こよう。」

とおっしゃつて、調使丸ちようしまるという召使めしつかいの小舎人ことねりをくらの後うし

ろに乗のせたまま、馬うまの背せに乗のつて、そのまますすつと空そらの上うへへ飛と

んでお行きいになりました。下界げかいでは、

「あれ、あれ。」

といつて騒さわいでいるうちに、太子たいしはもう大和やまとの国くに原はらをはるか

後あとに残のこして、信濃しなのの国くにから越こしの国くにへ、越こしの国くにからさらに東ひがしの国くに

々にをすつかりお回りまわになつて、三日みつかの後のちにまた大和やまとへお帰りかえに

なりました。この時とき太子たいしのお歩きあるになつた馬うまの蹄ひづめの跡あとが、国くに々ぐに

の^{たか}高い山に^{いま}今でも^{のこ}残っているの^ごでございます。

またある^{とき}時、^{たいし}太子は^{てんし}天子さまの^{ごぜん}御前で、^{しょうまんきよう}勝鬘^{きよう}經という^おお

經の^{きようこうしやく}講釈^ををおはじめになつて、ちようど三日^{みつ}めにお^{きよう}經がすむ

と、^{そら}空の上から^{じやくはば}三尺も幅のあるきれいな^{れんげ}蓮花^がが降^ふつて来^きて、やが

て^ち地の上に^{しやくたか}四尺も高^{つも}く積^つりました。その^{れんげ}蓮花^をを明^あくる朝^{あさ}天子さま

が^{ごらん}御覽になつて、そこに^{たちばなでら}橘寺^{てら}という^たお寺をお立^たてになりまし

た。

またある^{とき}時、^{にほん}日本の^{くに}国から^{くに}シナの^{おの}国へ、^{いもこ}小野妹子^{という}という^を人をお

使^{つか}いにやる^{こと}になりました。その^{とき}時^{たいし}太子は^{いもこ}妹子^むに向^むかい、

「^{しな}シナの^{こうざん}衡山^{という}という^{てら}山の上のお寺は、むかしわたしが^す住^すんでい

た^{ところ}所だ。その^{じぶん}時分^{いっしよ}いっしよにいた^{そう}僧^{たち}たちは^いたい^し死^しんだが、ま

だ三人は残っているはずだから、そこへ行つて、むかしわたしが始終つかつていた法華經の本をさがして持つて来ておくれ。」

とおつしやいました。

妹子はおいしいつけの通り、シナへ渡るとさつそく、衡山とい

ところ

う所へたずねて行きました。そしてその山の上のお寺へ行くと、

門に一人の小坊主が立っていました。妹子がこういう者だと

いつて案内をたのみますと、小坊主はもう前から知っていると

いったように、

「和尚さん、和尚さん、思禪法師のお使いがおいでになりましたよ。」

したよ。」

といいました。するとお寺の中から腰の曲がつたおじいさんの

坊^{ぼう}さんが三人^{にん}、ことごと杖^{つえ}をつきながら、さもうれしそうにやつて来て^き、太子^{たいし}の御様子^{ごようす}をたずねるやら、昔^{むかし}話を^{はなし}するやらしたあとで、妹子^{いもこ}のいうままに、一卷^{かん}の古い法華經^{ほけきよう}を出^だして渡^{わた}しました。妹子^{いもこ}はそれを持^もつて、日本^{にほん}へ歸^{かえ}つたということです。

四

太子^{たいし}のお住^すまいになつていたお宮^{みや}は大和^{やまと}の斑鳩^{いかるが}といつて、今^{いま}の法隆寺^{ほうりゆうじ}のある所^{ところ}にありました。その母屋^{おもや}のわきに、太子^{たいし}は夢殿^{ゆめどの}という小^{ちい}さいお堂^{どう}をおこしらえになりました。そして一^ひ月^{つき}に三度^どずつ、お湯^ゆに入^{はい}つて体^{からだ}を浄^{きよ}めて、そこへお籠^{こも}りになり、

ほとけみち 仏の道の修しゆぎよう行ぎやうをなさいました。

ある時とき太子たいしはこの夢ゆめ殿どのにお籠こもりになつて、七日なぬか七夜しちやもまるで

外そとへお出でにならないことがありました。いつもは一晚ひとばんぐらいお

籠こもりになつても、明日あすの朝あさはきつとお出でましになつて、みんなに

いろいろと尊とうといお話はなしをなさるのに、今日きようはどうしたものだろうと

思おもつて、お妃きさきはじめおそばの人しんたちが心しん配ぱいしますと、高麗こまの国くに

から来きた恵慈えじという坊ぼうさんが、これは三昧さんまいの定じように入いるといつて、

一いつしん心しんに仏ほとけを祈いのつておいでになるのだらうから、おじやまをしな

いほうがいいといつて止とめました。

するとちようど八日ようかめの朝あさ、太子たいしは夢ゆめ殿どのからお出でましになつ

て、

「先^{せん}だつて小野^{おのの}妹子^{いもこ}の取^とつて来^きてくれた法華^{ほけき}経^{きやう}は、衡山^{こうざん}の坊^{ぼう}さんがぼけていたと見^みえて、わたしの持^もつていたのでもないのをま
ちがえてよこしたから、魂^{たましい}をシナまでやつて取^とつて来^きたよ。」

とおつしやいました。

その後^{のち}また小野^{おのの}妹子^{いもこ}が二度^どめにシナへ渡^{わた}つた時^{とき}、衡山^{こうざん}のお寺^{てら}
を訪^{たず}ねると、前^{まえ}にいた三人^{にん}の坊^{ぼう}さんの二人^{ふたり}までは死^しんでしまつて、
一人^{ひとり}だけ生^いき残^{のこ}つておりましたが、その坊^{ぼう}さんの話^{はなし}に、

「先^{せん}年^{ねん}あなたのお国^{くに}の太子^{たいし}が青い龍^{あおりゆう}の車^{くるま}に乗^のつて、五百^{にん}人^{じん}の家^け
来^{らい}を従^{したが}えて、はるばる東^{ひがし}の方^{ほう}から雲^{くも}の上^{うへ}を走^{はし}つておいでになつて、
古^{ふる}い法華^{ほけき}経^{きやう}の一巻^{かん}を取^とつておいでになりました。」

と言^いつたそうでございます。

五

太子たいしのお妃きさきは膳かしわで臣きみの君きみといつて、それはたいそう賢かしこくてお美うつくしい方かたでしたから、御夫婦ごふうふのお仲なかもおむつまじゅうございました。
ある時ときふと太子たいしはお妃きさきに向むかつて、

「お前まえとは長年ながねんいっしょにくらして来きたが、お前まえはただのひとこ一ひとこ言こともわたしわたしの言葉ことばに背そむかなかつた。わたしわたしたちはしあわせであつたと思おもう。生いきているうちそうであつたから、死しんでからも同おなじ日ひに、同おなじお墓はかの中なかに葬ほうむられたいものだ。」
とおつしやいました。お妃きさきは涙なみだをお流ながしになりながら、

「どうしてそんな悲しいことをおつしやるのでございますか。このさき百年も千年も生きていて、おそばに仕えたいと、わたくしは思っているのです。ごいますのに。」

とおつしやいました。けれども太子は首をおふりになつて、

「いやいや、初めがあれば終りのあるものだ。生まれたものは必ず死ぬに極まつたものだ。これは人間の定まつた道でしかたが

ない。わたしもこれまでいろいろのものに姿をかえ、度々人

間の世に生まれ変わつて来て、仏の道をひろめた。とうとうお

しまいにこの日本国の皇子に生まれて来て、仏の道の跡方も

ない所に法華の種を蒔いた。わたしの仕事もこれで出来上がった

のだから、この上永く、むさくるしい人間の世の中に住んでい

ようとは思おもわない。」

としみじみとお話はなしをなさいました。お妃きさきはなおなお悲かなしくおな
りになつて、とめ度どなく涙なみだがこぼれて来きました。

ちようどそのころでした。太子たいしは摂津せつの国くにの難波なにわのお宮みやへおい

でになつて、それから大和やまとの京きようへお歸かえりになるので、黒馬くろうまに乗の

つて片岡山かたおかやまという所ところまでおいでになりますと、山の陰かげに一人物ひとりもの

も食たべないとみえて、見みるかげもなく、瘦やせ衰おとろえたこじきが、虫むし

のように寝ねていました。お供ともの人たちは、太子たいしのお馬うまさき先みぐるに見苦

しいと思おもつて、あわてて追おいたてようとしますと、太子たいしはやさし

くお止とめになつて、食たべ物ものをおやりになり、情なさけぶかいお言葉ことばを

おかけになりました。そして歸かえりしなに、

「寒い^{さむ}だろうから、これをお着^き。」

とおつしやつて、召^めしていた紫^{むらさき}色^{いろ}の御袍^{おうわぎ}をぬいで、お手^て

ずからこじきの体^{からだ}にかけておやりになりました。その時^{とき}、

「しなてるや

かたおかやま

片岡山に

飯^いに飢^うえて

臥^ふせる旅^{たび}びと

あわれ親^{おや}無^なし。」

という和歌^{わか}をお詠^よみになりました。

「しなてるや」というのは、片岡山^{かたおかやま}という言葉^{ことば}に冠^{かぶ}せた飾^{かざ}りの

枕言葉^{まくらことば}で、歌^{うた}の意味^{いみ}は、片岡山^{かたおかやま}の上に御飯^{ごはん}も食^たべずに飢^うえて

寝ねている旅たびの男おとこがあるが、かわいそうに、親おやも兄きょうだい弟いもない、
かなしい身みの上うへなのであろうかというのです。

するとその時とき、寝ねていたこじきが、むくむくと頭あたまをあげて、

「斑いかるが鳩や

とみ おがわ
富とみの小川おがわの

絶たえばこそ

我わがおおきみ大君みの

御名みなを忘わすれめ。」

と御返歌ごへんかを申もうし上あげたといいます。

歌うたの中なにある「斑いかるが鳩が」だの、「富とみの小川おがわ」だのというのは、

いずれも太子たいしのお住すまいになつていた大和やまとの国くにの奈良ならに近ちかい所ところの

名^なで、その富^{とみ}の小川^{おがわ}の流れ^{なが}の絶^たえてしまうことはあらうとも、太^た子^{いし}さまの今日^{きよう}のお情^{なさ}けをけつして忘^{わす}れる時^{とき}はございませんというのでございます。

さて太^{たい}子^{いし}は奈^{なら}良^{きよう}の京^{きやう}へお歸^{かえ}りになりましたが、その後^{あと}で片岡^{かたおか}

山^{やま}のこじきは、とうとう死^しんでしまいました。太^{たい}子^{いし}はそれをお

聞^ききになつて、たいそうお嘆^{なげ}きになり、手^てあつく葬^{ほうむ}つておやりに

なりました。それを聞^きいた七^{にん}人^{だいじん}の大^{たい}臣^{しん}が、太^{たい}子^{いし}さまともあるも

のがそんな軽^{かる}々^{がる}しい事^{こと}をなさるとはいつて、やかましく小言^{こご}

を申^{もう}しました。太^{たい}子^{いし}はその話^{はなし}をお聞^ききになると、七^{にん}人^{だいじん}の大^{たい}臣^{しん}を

呼^よび出^だして、

「お前^{まえ}たちはそんなむずかしいことをいつていないで、まあ片^{かた}お

岡山^{かやま}へ行つてごらん。」

とおつしやいました。

大臣^{だいじん}たちはぶつぶつ言いながら、ともかくも片岡山^{かたおかやま}へ行つてみますと、どうでしょう、こじきのなきがらを収めた棺^{おさ ひつぎ}の中は、いつか空^{から}になっていて、中からはぷんとかんばしい香り^{かお}が立ちました。大臣^{だいじん}たちはみんな驚^{おどろ}いて、太子^{たいし}も、このこじきも、みんなただの人ではない、慈悲^{じひ}の功德^{くどく}を世^よの中の人たちにあまねく知らせるために、尊^{とう}い菩薩^{ぼさつ}たちがかりにお姿^{すがた}をあらわしたものだろうと思^{おも}うようになりました。

さてこのことがあつてから後間もなく、太子はある日お妃に向かい、

「いよいよ、いつぞやの約束を果たす日が来た。わたしたちは今夜限りこの世を去ろうと思う。」

とお言ひになりました。

そして太子とお妃とはその日お湯を召し、新しい白衣にお着替えになつて、お二人で夢殿にお入りになりました。

明くる日の朝、いつまでもお二人ともお目ざめにならないので、おそばの人たちが不思議に思つて、そつと御堂の中に入つてみますと、お二人はまくらを並べたまま、それはそれは安らかに、ま

るでいつもやすやすやお休みやすになつてゐるような御様子ごようすで、息いきを引ひき取とつておいでになりました。お体からだからはぷんと高くたか、かんばしいにおいたいしが立ちたました。太子たいしのお年としは、四十九歳さいでございました。太子たいしのおかふるくれになつた日、シナの衡山こうざんからとつておいでになつた古い法華經ほけきようも、ふと見えみなくなりました。それもいっしよに持もつておいでになつたのだらうということです。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：今井忠夫

2004年1月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢殿

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>